



東京日々新聞

九百廿六号



二階より寝て居る此家の嫁が戦慄を以て死産より這出る
 管見土蔵の家根の押へる石を踏む其躬は下つ
 唾と落つ響は怪しく毛落しと轉來る
 石と盜賊の棟上誰から人
 ろつて碌と打とや
 思ひたん畳の上
 突立ると又と風呂鋪包は捨置

不残待のけ野郎にホセと譴責る
 盜押入に家内
 方一或夜移
 村ある疊屋果が
 秩父郡阿蘇

縛々堂主人記

何所ともなく逃去ぬ嫁も
 氣絶は去るれと中暫ありて
 蘇生家内一同怪我も
 せよ此災厄は
 免さる

金足屋

